

日中数量詞用法の違いと中国人日本語学習者の誤用

——存現文において——

温州医科大学 藤 小春

要旨：これまで、日中存現文において数量詞（単数）を名詞に付加するかどうかに関する研究は、論述のみを通して結論を出すものがほとんどであった。本稿ではこれについて実証的に（インタビューと実験で）考察した。その結果、日本語の存現文では名詞に数量詞を付加しないこと、中国語の存現文では名詞に数量詞を付加することを実証的に確認した。また、中国人学習者は日本語の存現文の名詞に数量詞を付加しないということを、容易に習得できないことも確認した。さらに中国人学習者が存現文において数量詞を誤用する原因について詳しく分析し、改善法を提案した。

キーワード： 日本語 中国語 存現文 数量詞

1. はじめに

日本語と中国語の数量詞の用法の違いに関しては、多くの研究で指摘されている（たとえば、望月 1974、中川、杉村 1975、中川 1982、大河内 1985、輿水 1986、坂本 1996 いて中川、李 1997、樋口 2007a、b）。数量詞の用法においては、中国語のほうがより複雑だと考えられる。中国語の複雑さは、主にどのような場合に数量詞を名詞に付加するのか説明しにくいことである（たとえば、Cheung 1977、Sun 1988、Li 2000、Chen 2003、安井 2003、劉 2004、呉 2005、藤、小川 2007、藤 2009a、b、c、2010、2014、Teng 2009、Teng et al. 2010）。これに対し、日本語の数量詞をいつ名詞に付加するかについては、それほど複雑な問題ではない。数量詞の位置に関する論説があるが、いつ数量詞を付けるべきなのかという研究は少ない。その理由は主に、日本語の数量詞がいつ必要であるか明白だと考えられるからである。研究だけではなく、日本語の教科書や文法書も数量詞の用法についてほとんど言及していない（たとえば、『学習者の発想による日本語表現文型例文集』（坂本 1996）、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』¹⁾（庵功等 2001））。たとえ数量詞に関しての説明があっても、数量詞が必要かどうかということではなく、数量詞の位置についての説明がある程度である（例えば、『ケーススタディ日本文法』（寺村等 1987）、『学習者の発想による日本語表現文型例文集』（坂本 1996））。これは日本語の数量詞が、使うべきか否かということは問題とされていないということである。つまり、日本語においてはいつ数量詞を使用すべきかは明らかだと考えられているのである。以上の理由で、中国人の日本語学習者にとっても、いつ日本語の数量詞を使用すべきであるかは難しくないと考えられる。しかし、日本語の数量詞の用法は、本当に中国人学習者にとって習得しやすいのかどうか、これまで詳しい実証的な研究はほとんどない。本稿では、存

現文（存在、出現、消滅を表す文）²⁾において、数量詞（本研究で単数数量詞だけを扱う）を付加するか否かという問題について、日中両言語の違いがあるのかを、先行研究を踏まえて考察する。さらに、その考察の結果から、中国人日本語学習者が存現文における数量詞を誤用しやすいのか否かを確認する。最後に、誤用があれば、その原因について分析し、改善法を提案してみる。

2. 先行研究

日中両言語の存現文中の名詞（本稿では存在、出現、消滅する物事を指す名詞）に付加する数量詞の用法の違いについて述べた文法書は少なくない（たとえば、望月 1974:47-48、興水 1986:145）。その違いは、中国語の場合は数量詞が必要で、日本語の場合はそうではないというものである。たとえば、

- (1) 树上有一只小鸟。
木の上に小鳥が[一羽]いる。
- (2) 前边来了一个人。
前に人が[一人]来た。
- (3) 他家死了一头牛。
かれの家で牛が[一頭]死んだ。

以上3例は望月（1974）から引用

- (4) (有) 一个学生走进来了。
[一人の]学生が入ってきた。

以上は興水（1986）から引用

以上4つの例においては、中国語の文の名詞に数量詞がなくてはならないとされている。日本語の場合に、望月（1974:48）は(1)、(2)の日本語の文においてむしろ数量詞がない方が普通だと述べ、興水（1986:145）も(4)において、日本語から見ると数量詞が置かれることが多いと述べている。筆者が注意したのは、両者の説明とも日本語の存現文の名詞に数量詞は加えない、また数量詞を加えても問題にはならないと述べていると受け取れる箇所がある。したがって、本研究では、上記の文構造において、存在、出現する物事（消滅する物事を除く）を表す名詞に数量詞を付加すべきかどうかという問題について、実証的に再検証する。比較しやすくするため、日中言語両方の存現文の数量詞用法についてインタビューを通じて考察する。

3. 数量詞付加状況確認

日中両言語の存現文の名詞に数量詞を付加するかどうか、日本語と中国語の母語話者それぞれにインタビューを通して確認する。

3.1 インタビュー 1 (日本語の場合)

前文の例 (1) と (2) について、6名の日本人大学生(全員日本語の母語話者で18—20歳)に、木の上に一羽の小鳥がいるという状況を人に伝えるとき、「木の上に小鳥がいる」と言うか、或いは「木の上に一羽の小鳥がいる」と言うか尋ねた。もし言わない場合は、なぜそう言わないのかについて、その理由も聞いた。同様に、前方から一人の人が来たのを見て、その状況を人に伝える場合、「前から人が来た」と言うのか、或いは「前から一人の人が来た」と言うのか、もし言わないのならば、その理由も答えてもらう。これで、数量詞を使用するかどうかについて明白な回答が求められる。

インタビュー 1 結果は表 1 の通りである。

表 1 日本語の存現文中の名詞に数量詞を使用するか否かの回答人数

	使用	不使用
A	0	6
B	0	6

A: 木の上に_____小鳥がいる。 B: 前から_____人が来た。

本研究でインタビューした日本語の母語話者の人数は多くないが、6人全員ともこの二つの文において、名詞に数量詞を加えると違和感があるため、数量詞を用いない文しか使わないと回答した。数量詞を用いるのは、特にその数量を強調している印象になってしまうので、そうでない場合通常数量詞は付けないとの理由だった。しかもその理由を述べるのに、特に悩む様子もなく、すぐに答えることができた。ということは、名詞の数量が一般的な範囲内であれば、(1) と (2) の日本語において、名詞に数量詞を加えないと考えられる。以上の調査結果は、日本人にとって、存現文の名詞の数量は必要な情報ではないということも示している。したがって、(1) と (2) のような存現文においては、名詞に数量詞を加えないということは、一つの文法であるとも言える。

3.2 インタビュー 2 (中国語の場合)

中国語の存現文 (1) と (2) 中国語文において、名詞に数量詞を加えるかどうかについてもインタビュー 1 と同様に、5人の中国人(全員中国語の母語話者で、22歳以上)に対

してインタビュー 2 を実施した。

インタビュー 2 の結果は表 2 の通りである。

表 2 中国語の存現文中の名詞に数量詞を使用するか否かの回答人数

	使用	不使用
A	5	0
B	5	0

A：樹上有_____小鸟。 B：前边来了_____人。

インタビュー 2 の結果は、インタビュー 1 の結果と正反対である。5 名の中国人被験者は全員両文中の名詞に数量詞を加える必要があると回答した。数量詞のない文は使わない理由については、数量詞がないと違和感があると全員が答えた。しかし、被験者にその理由を尋ねると、名詞の数量が情報として必要であるからという答えはなかった。したがって、中国語の存現文の名詞に数量詞が必要なのは、意味上ではなく文法上であると言える。

これら二つのインタビューの結果から、日中存現文において、数量詞の用法は確かに異なるということを確認した。日本語の存現文では名詞に数量詞を用いないのに対し、中国語の存現文の名詞には数量詞が必要であると分かった。

4. 習得状況の実験確認

日本語において数量詞を加えるかどうかは、難しい問題ではなく、中国人学習者にとっても理解しやすいものである可能性はある。しかし、日中言語の違いにより、中国人日本語学習者が母語の干渉を受け、存現文の名詞に特に数量詞は必要ない点について、十分理解できていない場合もあるかもしれない。それについては確認する必要があると考えられるため、以下の実験を通して考察してみる。

4.1 被験者

被験者は来日 1 年以内の中国人留学生（中国語の母語話者で、22 歳以上）5 名と来日 2 年以上の中国人留学生（中国語の母語話者で、24 歳以上）4 名である。来日 2 年以上の被験者は、日本語の環境で勉強や生活をしている時間が比較的長く、日本語のレベルが来日 1 年以内の留学生と異なるため、両者を分けて考察する。来日 1 年以内の被験者を 1 年組、2 年以上の被験者を 2 年組と称する。

4.2 方法

インタビュー2と同様に、(1)と(2)の中国語の文を被験者の両グループに見せ、日本語に口頭で訳してもらう。その日本語訳において、数量詞を使用したかどうかを考察する。

4.3 結果と分析

その結果、表3の通りである。

表3 日本語訳に数量詞を使用した人数と使用しなかった人数

	使用	不使用
1年組	4	1
2年組	2	2

1年組の日本語訳と2年組の日本語訳の両者において、数量詞を用いた者がいた。1年組の被験者は5名中4名が数量詞を用いた。2年組の被験者は4名中2名が数量詞を加えた。1年組の被験者の日本語レベルはとても高いとは言えないが、2年以上日本で勉強や生活をしてきた2年組は、日本語のレベルが相当高い。したがって、中国人日本語学習者は、日本語を高いレベルにまで習得するまでの長い期間にわたって、母語の干渉を受け、実際は不必要な数量詞を誤って加える可能性が高い。ゆえに、日本語の存現文中の名詞に数量詞を加えないということは、中国人学習者が必ずしも自然に気づき、すぐに習得できるというものではないと言える。日本語において、存現文中の名詞に数量詞は用いないということは、特に説明が難しいというものではない。これはインタビュー1の日本人被験者が、全員数量詞が不要な理由を難なく説明できたことから分かる。日本人被験者が回答した数量詞が不要な理由は、中国人日本語学習者にも容易に理解できるものと考えられる。したがって、不必要な数量詞を加えてしまうという誤用は、主に中国語の母語の干渉を受けたため起きたと考えられる。1年組と2年組の誤用の原因について、以下のようにさらに詳しく分析してみる。

- 1) 存現文中に存在または出現する名詞に数量詞を加えないことは、日本語の教科書や文法書などで扱われておらず、特に指摘もされていない。日中言語の対照研究を行わなければ、数量詞を用いないという文法の規則を教科書や文法書などに入れる必要はないとみなされてしまう。しかし、実際のところ、中国人学習者にとって、数量詞を加えないことを自力で発見するのは容易なことではない。
- 2) 数量詞を加えないことを教わったことのある学習者でも、数量詞を加える場合もあると考える可能性がある。教わってはいいても、母語の干渉を強く受け、日本語を話すとき数量詞を用いないと気が済まないという心理が無意識に働き、つい誤用を犯す可能性がある。また、数量を明確にする必要のある情報であれば、日本語の存現文の名詞に数量詞を加えても違和感がない。日本語の母語話者は、その数量を特に強調したい

場合、あるいは数量情報を提供する必要がある場合、(5)にある「鳥」に数量詞を加える。例えば、

- (5) A：窓の外に何羽の鳥がいるか。
B：窓の外に一羽の鳥がいる。

このような現象に出会うと、中国人学習者は文脈に関わらず、(1) - (4)の日本語文の名詞に数量詞は不要であるという意識が薄くなり、日本語を話すとき、つい数量詞を加えてしまうことも考えられる。

日本語では存現文中の名詞に数量詞を加えないということを教わったことがあるにも関わらず誤用を犯す理由は、二つのパターンに分けられる。一つは、このルールを教わったものの、忘れてしまったため、誤って存現文中の名詞に数量詞を加えてしまう場合。このような学習者は、口頭においてのみならず、筆記においても誤用を犯す。もう一つは、知識としてはそのルールを知っているものの、それを流暢にアウトプットできるまでには習得できていない場合。このような学習者は、日本語を話す場合、知識を実践に活かしていないため、母語の干渉を受け、つい誤って数量詞をつけてしまうと考えられる。しかし、彼らは文を書くときには、文法を確認することができるため誤用を犯さない可能性がある。

4.4 誤用問題の改善について

中国人学習者の誤用を改善するため、少なくとも中国人学習者向けの日本語の教科書や文法書などでは、存現文中の名詞に数量詞を通常加えないという説明を加えるべきである。日中両言語の存現文の例を挙げ、その数量詞の用法の違いを解説すれば、より効果的だと考えられる。また学習者は、たとえその用法について習ったとしても忘れてしまうこともあるし、知識としては知っていても、適切にアウトプットできるまでに定着できない場合もあるので、教師は繰り返し学習者に存現文を用いた表現活動の機会を設けたり、学習者の誤用を適宜指摘したりする必要がある。ある一定の期間繰り返し学習することにより、中国人学習者は母語の干渉から抜け出し、日本語のルールを実践レベルにまで定着させることができると考えられる。

5. まとめ

本稿では、存現文において数量詞を名詞に加えるべきかどうかについて、日中それぞれの言語の母語話者にインタビューを行い、実証的に考察した。その結果、日本語の存現文においては通常名詞に数量詞を加える必要はないが、中国語の存現文においては通常名詞に数量詞を加えるということを確認した。また、母語の干渉を受けるため、中国人日本語学習者が、日本語の存現文における数量詞について、誤用が多くあることも確認した。つまり、中国人学習者が、日本語の存現文において名詞に数量詞を加えないという点について、簡単に習得できないことも分かった。問題を解決するため、中国人向けの教科書や文法書

などに、存現文中の名詞に通常数量詞は不要であるという説明を加える必要がある。また、中国人学習者が、たとえ数量詞が不要であることを教わっていたとしても、必ずしも正しくアウトプットできるわけではないと分析した。それは主に母語の干渉により、そのルールを忘れやすく、正しく使いこなせるまでには定着していないことが原因である。したがって、教える側が、中国人学習者に数量詞が不要であることを知識として教えるだけでなく、一定の期間繰り返し存現文を用いた表現活動の機会を与えたり、意識して誤用を訂正するようにすることが必要であると提案した。

注：

- 1) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』では「数量詞」と言及したが、その「数量詞」は「これだけ」、「もう少し」というような表現であるため、本研究の扱っている数量詞ではない。
- 2) 存現文の定義は望月（1974:47）によるものである。

参考文献：

- 庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（白川博之監修）。東京：株式会社スリーエーネットワーク
- 呉麗君 2005. 談話における不特定を表す「数詞＋量詞」の構造、『中国語の誤用分析：日本人学習者の場合』（西川和男編訳），52-69。大阪：関西大学出版部。
- 樋口幸子 2007a. 「数量詞の表現誤用に関する一考察—誤用調査および誤用防止へむけた一提案」、『中国語教育』第5号。中国語教育学会
- 樋口幸子 2007b. 単数時の数量詞付加に関する考察、『日中言語対照研究論集』第9号。pp. 89-103, 日中対照言語学会
- 興水優 1986. 『中国語の語法の話：中国語文法概論（中国語研究学習双書8）』。東京：光生館
- 益岡隆志、田窪行則 1992. 『基礎日本語文法—改訂版』。東京：くろしお
- 望月八十吉 1974. 『中国語と日本語（中国語研究学習双書13）』。東京：光生館
- 中川正之 1982. 中国語の名詞と日本語の名詞、『未名』2号。神戸大学中文研究院
- 中川正之、李浚哲 1997. 日中両国における数量表現、『日本語と中国語の対照研究論文集』, 95-116。東京：くろしお出版社。
- 中川正之、杉村博文 1975. 日中両国語における数量表現、『日本語と中国語の対照研究』1号, 日中語対照研究会
- 大河内康憲 1985. 量詞の個体化機能、『中国語学』232, 1-13。日本中国語学会
- 劉憲民 2004. 汉语“一”+量詞的意义及功能-与英语“a (n)”之比较, *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 39: 1, 85-99。
- 坂本正 1996. 『学習者の発想による日本語表現文型例文集』。東京：凡人社
- 寺村秀夫、鈴木泰、野田尚史、矢澤真人 1987. 『ケーススタディ 日本文法』。東京：桜楓社
- 藤小春、小川泰生 2007. 中国語数量詞の話題導入機能, 『人間科学研究』, 47-57。広島大学総合科学研究科。
- 藤小春 2009a. 打破理性, 创造情绪的“(一)个”, *US-China Foreign Language* 7 (9), 11-16.
- 藤小春 2009b. 不定冠詞と中国語数量詞の話題導入機能の比較研究, 『欧米文化研究』第16号, 133-145。広島大学社会科学部国際社会論専攻
- 藤小春 2009c. 中国語単数数量詞の数量、属性表現に関する一考察：英語不定冠詞との対照研究, 『東アジア言語研究』第12号, 32-45。東アジア言語学会
- 藤小春 2010. 漢語名詞的性質和數量詞使用的關係, 『華語文教学研究』第七卷第2期, 25-38。世

- 界華語文教育学会
滕小春 2014. 數量詞話題導入功能的適用名詞範圍, 《華語學刊》第 17 期, 8-33. 台湾華語文教學學會
安井二美 2003. “是（一）个 N” の認知言語学的アプローチ, 『中国語学』 250 号, 151-170. 日本中国語学会
Chen, P. 2003. Indefinite determiner introducing definite referent: a special use of ‘yi ‘one’ + classifier’ in Chinese. *Lingua* 113: 1169-1184.
Cheung, Hung-nin Samuel 1977. A Study on the Use of yige. *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 12: 2-7.
Li, W. 2000. The pragmatic function of numeral-classifiers in Mandarin Chinese. *Journal of Pragmatics* 32: 1113-1133.
Sun, C. 1988. The Discourse Function of Numeral Classifiers in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 16: 298-323.
Teng, X. 2009. An Experimental Investigation of “(yi) CL” in “Shi (yi) CL NP”. *US-China Foreign Language* 7, 12: 37-43.
Teng, X., Y. Ogawa, and J. Yamada 2010. Japanese Learner’s Characteristic Errors of the Chinese Numeral Classifier Sequence yi ge: Learning and/or Unlearning? *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 45, 1: 89-101.

中文要旨：

日汉存现文中数量词用法比较及中国人日语学习者的误用

温州医科大学 滕小春

摘要：迄今为止，关于汉语和日语的存现文中名词是否附加数量词的论述很多都停留在通过讨论得出结论的方法上。本文就同样问题通过访问调查和实验进行了实证性考察。再度确认了日语的存现文中名词并不附加数量词，而汉语的存现文中名词却需要数量词的规则。然后本文还发现，中国学习者并不能很容易地习得日语的存现文中名词不用数量词的知识。并对中国学习者在这一知识点上的数量词误用的详细原因和改善方法做了分析。

关键词：日语 汉语 存现文 数量词